

Claudia Nowak,

*Was ist des Elsässers Vaterland?
: Die Konstruktion regionaler und
nationaler Identitäten in einer
Grenzregion zwischen Frankreich und
Deutschland in der ersten Hälfte des
19. Jahrhunderts (1813-1848)*

園 屋 心 和

本書は、著者が二〇〇八／〇九年冬学期にテュービンゲン大学（ドイツ）に提出した博士論文を公刊したもので、一九世紀前半のアルザスにおける、地域並びに国民アイデンティティの関係を考察している。最初に、本書の執筆背景と構成について記した後、各論の内容を紹介し、その上で、本書全体に関わる問題点を取り上げることとした。

まず、本書の大きな動機をなすのは、近年の国民国家と地域に関する研究の進展である。旧来の国民主義的な研究では、地域は、国民形成の阻害要因と捉えられがちであったが、近年では、むしろ、地域アイデンティティと国民的なそれが相互補完的に形成されたことが強調されている。そして、両者を媒介したのが、「小さな祖国 *petite patrie*」(ドイツ語は「故郷 *Heimat*」)とよばれ

る概念である^①。すなわち、「小さな祖国」「地域」は、「大きな祖国」「国民国家」のミニチュアであると同時に、国民（文化）の多様性を保障する要素であった。

仏独両国の境界に位置するアルザスは、このような小さな祖国の中でも、国民、地域、ローカルの三つの次元における、アイデンティティの形成過程の交錯と背反を考察する上で、他に類例のない地域である（一〇一頁）。しかし、著者によれば、アルザスがドイツ帝国に属した一八七一年から一九一八年までの時期に関しては、先行研究が多数あるものの、それ以前の時期については皆無に等しい。だが、革命を経て国民国家となったフランスに関しては、国民・地域形成の過程並びに両者の関係は、遅くとも一九世紀前半にまで遡って考察されねばならない。それ故、一九世紀前半のアルザスにおいて、アルザス人の「我々意識」や地域意識がどのような形で表現されたか、これらと国民アイデンティティはいかなる関係にあるかを問い、かつ、上述の、近年の研究が提示したテーゼの妥当性を検証することが本書の目的である。

次に、構成だが、序論（本書の章立て番号Ⅰ）に続き、Ⅱは、アルザスの帰属問題に関する議論を、反ナポレオン戦争からウィーン会議に至る一八一三から一五年までの時期（Ⅱ、Ⅰ）、及び、一八四〇／四一年の「ライン危機」の時期（Ⅱ、Ⅱ）に関して分析する。Ⅲでは、祝祭と記念碑が考察され、一八四〇年のストラスブルにおけるクレベール將軍の追悼式と記念碑の除幕（Ⅲ、Ⅰ）、一八四〇年のストラスブルにおけるグーテンベルク記念祭と記念像の除幕（Ⅲ、Ⅱ）、そして、一八四八年の、コルマール、ミュルーズ、ストラスブルにおける、ウェストフアリ

ア講和二〇〇周年記念祭と記念碑の定礎式(Ⅲ、3)の三つがその対象となる。そして最後に結論部(Ⅳ)が来る。なお、著者の関心は、公共空間における言説の分析にはば絞られているため、利用史料は、新聞を主とする刊行物が中心で、これを補う限りで官公庁の報告書などの未公刊史料が用いられている。また、Ⅲでは、図版も補足的に利用されている。

では、各論の内容に移ろう。まず、Ⅱ、1では、「アルザス問題」に関する典型的な言説が、一九世紀後半ではなく前半にすでに見られることが指摘される。すなわち、アルントやゲレスなどのドイツ・ナショナリストが、ドイツ語とドイツ文化の共通性に基づいて、アルザスのドイツへの帰属を主張したのに対し、アルザスでは、詩人のE・ストベールが、アルザスがドイツと文化的つながりを持つ一方で、フランス文化をも摂取してきたことを述べた上で、文化と政治を区別し、共にフランス革命を経験したフランスこそがアルザス人の祖国だと言明したのである。加えて、著者は、ストベールの反論から、彼の国民意識だけでなく、仏独二重文化に基づくアルザス地域意識の萌芽も見て取っている。

ところで、ライン危機とは、一八三九―四一年のエジプト危機との関連で、フランス世論が、ウィーン体制の修正とライン左岸地域の回復を求めたことがドイツ世論を刺激し、仏独関係が緊張したことを指す。Ⅱ、2は、このライン危機における独仏新聞紙上の論戦と、これに関与したアルザス紙の主張を分析し、この出来事と、アルザスの国民・地域アイデンティティとの関わりを問うている。

まず、仏独の筆戦から読み取れるのは、国民観の相違と過去の

記憶の持続性である。すなわち、フランス側は、ラインを侵略する意図はなく、自由を与えて解放するのだと主張し、ライン住民もこれを歓迎するだろうと報じていた。対して、自由よりも国民・民族の一体性が重視されたドイツでは、フランスの征服欲はこの一体性を著しく侵害するとされ、ライン要求にはアルザスの回復をもつて応じる旨が発信された。著者は明言していないが、本書の記述を評者なりに解釈すると、フランスの主張の背後には、ライン地域は、革命・ナポレオン時代のフランス支配の遺産と記憶を肯定的な意味で保持しているとの観測と、フランス革命期に生まれた国民観、すなわち、革命の諸原理やこれが生み出した諸制度に賛同する者こそが国民であるという考えがあったと見てよい。他方、ドイツでは、自由の名の下に圧政を敷いたフランス支配にドイツ民族が一致団結して戦い、独立を勝ち取ったという「解放戦争」の記憶と神話が大きく作用しており、理念や制度の普遍性とそれへの賛同よりも、民族の一体性こそが国民形成の核と考えられたのである。

ライン危機では、上のような主張の応酬がなされたのだが、そのことは単に仏独の国民意識を高揚させたのみならず、国民観の違いが、互いの国民統合の原理をより強固にすることになったと評者には思われる。とりわけ印象的だったのは、自由の名を騙ることへのドイツ側の不信、解放戦争時の記憶や「憎悪」に囚われすぎることにフランス側の疑問など、双方に理のある指摘が見られたにもかかわらず、両国民の相互理解を示唆するような言説は、本書からほとんど見てとれなかったことである。とはいえ、ドイツ側に、民族の一体性に固執することの危険を指摘する論者

もいたことを付言しておかねばならない。

さて、この仏独論争は、アルザスをドイツの国民観からさらに遠ざけることになった。すなわち、アルザス紙は、アルザスとフランスとの結びつきを強調した上で、言語と文化の共通性は政治的帰属とは別問題として、ドイツのアルザス領有を拒絶する点で一致している。但し、Ⅱ、Ⅰの時期と異なるのは、ドイツとの文化的・民族的共通性という点からも距離を取ろうとする傾向が目立つことである。例えば、アルザス人はドイツ民族に属するという見解に対して、現在のアルザス人は、フランスで生まれ、フランス的な教育を受けたフランス人であるという反論が見られた。四〇年代後半には、アルザス人はケルト人であり、ドイツ系ではないとする主張すら出現する。さらに、フランスとの文化的同化を主張する人々は、フランスへの帰属に賛同しているにもかかわらず、ドイツとの文化的つながりを重視する人々を「ドイツ派」として断罪した。本書は、これらは全て、アルザス要求の正当性をドイツから奪うための戦略であったことを示唆している。

本書が分析したアルザス紙の論調は基本的にフランスよりであるが、そこからは調停者としての独自の立場も読み取れる。例えば、ライン危機以前には、親仏的であったドイツの自由主義者や民主主義者までもが反仏的になったのは、自由主義運動を恐れるドイツ諸侯が、過去のフランス支配の記憶を利用して彼らの憎悪を煽っているからだとし、このような事態はドイツ自由主義の進展にとってマイナスだと説いた。そして、過去のフランス支配のよい面にも目を向けるよう促した。しかし、共和派系の「パッサン通信」紙のように、他方では、フランスは侵略者ではなく解放

者であるといったフランス側の主張をそのまま擁護したため、上のような説得もドイツでは欺瞞としか受け止められなかった。但し、穏健派の「アルザス」紙が、仏首相ティエールが反独世論を徒に煽っているとの非難する一方、フランスがラインを要求するのは、ドイツがアルザスを求めるのと同様、誤りだとしているのは注目すべき点である。こうしたアルザス独自の立場は、仏独双方の文化との関わりのみならず、同じく境界地域であるライン地域への理解にも由来するように評者には感じられた。

Ⅲは、三つの祝祭の目的、性格と構造、担い手、反響、祝祭と独仏関係との関連性、さらに、グーテンベルク、ウエストファリアの両祝祭に関しては、「ドイツの過去」の位置づけを問い、そこから地域と国民の関係を描き出している。ここでは、各祭典の細部は割愛し、上記の問題点に即して、本書の内容を略述したい。

一九世紀は国民的祭典・記念碑の時代と言われるが、本書の三祭典も国民的性格を持つ。すなわち、アルザスとフランスの強い結びつきを示すことが祭典の主題であった。革命期にヴァンデヤエジプト戦線で活躍した軍人クレベールは、フランスに忠誠を誓うアルザスの姿そのものであった。クレベール祭は、マルセイユのシャトー・ディフに置かれていた彼の亡骸をストラスブルに移して追悼し、郷土の英雄を顕彰することが目的であった。グーテンベルク祭は、グーテンベルクがストラスブルで印刷術を「発明」したという前提に立ち、印刷術の人類に対する普遍的役割を強調しつつ、さらに、これが啓蒙主義やフランス革命を生むに至ったという解釈を採ることで、アルザスのフランス史への貢献を示した。ウエストファリア講和二〇〇周年は、アルザスがフラン

スと一つになったことで、革命・帝政期のフランスの発展に寄与した事を祝うためのものであった。

そして、これらの祭典では、フランス国民への帰属を示すものとして、三色旗やラ・マルセイエーズ、フランス語が使用され、さらに国家を代表する軍隊ないし国民衛兵によるパレードが行われた。但し、ここで言うフランスへの忠誠は、革命・帝政期の記憶と結びついており、七月王政は、祭典が共和派の反体制運動に利用されることを恐れた。実際、グーテンベルク祭では、共和派が最終的に主導権を握り、また、七月王政の言論統制に対して出版の自由が擁護されることにもなった。とはいえ、パリ政府は、アルザスのフランスへの帰属意識までも疑っていたわけではない。それ故、フランスへの帰属を示す行為は、国内向けというよりはむしろ対ドイツ向けと考えられる。特に、第二共和政下のウエストファリア祭は、ドイツでアルザス領有をめぐる議論が再び活発化したことが直接の契機であった。但し、そこではドイツへの攻撃ではなく、むしろ、諸民族の融和や独仏友好が意図されていた。実際、ウエストファリア祭では国境を越えた民主主義者の会合があり、グーテンベルク祭でも多くのドイツ人の来訪があった。加えて、ドイツ的過去も否定されず、後者では、帝国都市シュトラースブルクの紋章や同市を象徴するマリア旗が掲げられるとともに、手工業者行列では、旧来のツンフトの旗や衣装も用いられた。前者でも類似の事実が確認される。ここにはすでに祭典の地域的かつローカルな特性が姿を見せている。

こうした特性からも理解されるが、三つの祭典は、国民的性格と並んで、強い地域的性格を有しており、基本的には地域祭典に

とどまったと評者には思われる。というのも、アルザスを除けば、三祭典に対するフランス国内の反響は乏しく、また、祭典の企画・実行を主導したのは、ストラスブール市の官吏、知識人、名望家などであり、これはアルザスの他都市の場合も同様だったからである。国家の側でこれに関与したのは、基本的に県知事に限られる（但し、クレペール祭の実現には軍部も関与している）。記念碑建設の寄付金集めは、国内外の複数の都市で行われ、国王や大臣も寄付者の列に名を連ねているが、その多くはアルザス住民であった。また、祭典への参加もほとんどがアルザスからであり、グーテンベルク祭のみ、パリやリヨンなど国内の複数の都市から代表団が派遣されている（その意味で、著者はこの祭典の地域的性格をもった国民祭典と記している）。

しかし、関与者の大半がアルザス人だったといっても、その全てがこれらの祭典を支持したわけではない。例えば、カトリック勢力は、グーテンベルク像の台座レリーフに当初ルターが描き入れられたことを、プロテスタントによる印刷術の占有と見て、これを強く非難した。そのため、ルターはエラスムスに替えられた。また、ウエストファリア祭に対しては、ルイ一四世の支配を正当化するものといった批判や、フランス国民であることを強調する祭典よりも、フランスとの文化的同化を推進するため、教育に資金を回すべきといった見解も見られた。さらに、ドイツ文化の監視を危惧する「ドイツ派」からは、ストラスブール市の文書館員 L・シュネーガンスが、アルザス人は、ドイツ的民族性ゆえに、完全なフランス人にはなりえないと指摘した上で、フランスとの同化を無批判に肯定するのではなく、仏独二重文化の維持に努め

ることが、両国の調停者としての役割を果たす上で重要だと述べた。また、本書の記述からすると、一般市民・民衆も観客として祝祭に参加し、概ねこれに好意的だったと見られるが、ウェストファリア祭では、行列の主役の座を軍に奪われたことへの不満もあったという。

以上の考察から、著者は、アルザス人の祖国はフランスであったと結論する。そして、この国民アイデンティティを強めたのは、一九世紀前半の仏独の戦争と危機であった。その上で、地域と国民の関係については、前者は後者に従属したと指摘した上で、ライン危機では、地域は（その境界性ゆえに）国民アイデンティティが確立する場として機能し、他方、記念祭典においては、地域性の確認と国民意識の表明は相互補完的關係にあると述べている。但し、フランスへの帰属や文化的同化を積極的に歓迎したか否かといった点については、党派、宗派、社会集団によって見解が分かれると留保している。だが、ドイツへの帰属は問題にならず、アルザスが仏独に代わる第三の選択肢となることもなかった。

さて、本書は、一九世紀前半のアルザスのアイデンティティを詳細に考察した上で、地域と国民の補完的關係のみならず、国民意識の表明と形成が、地域側のイニシアティブによって試みられた事実を明らかにした優れた労作である。また、これまで限られた研究しなかったライン危機を分析し、そこから、後のルナンとシュトラウスの論争で見られるような議論がそれ以前に存在したことを示したのも本書の功績に数えられる。しかし、これらの意義を認めた上でだが、評者にとってやや食い足りないさが残ったことも否めない。以下、その理由を二点記しておきたい。

第一に、本書は、既述のとおり、アルザス人の祖国はフランスであったと結論し、また、フランスへの忠誠の表明が、アルザス内の対立を後景に追いやるような地域的共属意識の創出に寄与したと述べている（二二〇頁）が、評者は、著者がこの点を強調するあまり、アルザス内部の多様性を結果的に軽視している印象を受けた。確かに、その後、クレペール祭がアルザス人の記憶に根を下ろした事実を考えれば、クレペール祭に関してはそのように言えるかもしれない。また、著者は、既述のようなアイデンティティ形成をめぐるアルザス内の諸集団・勢力の見解の相違に加えて、言語問題に起因する「フランス派」と「ドイツ派」の対立も指摘している（四一七頁）。

しかし、評者には、著者が、アルザス内のドイツ派の見解を少数意見とみなし（三二二頁）、フランス派の見解を自ずと重視しているように見える。だが他方では、フランス派が、民衆に対するドイツ派の影響力を恐れたことも示唆されており（一七〇頁）、著者はドイツ派の見解にもいさ少し配慮すべきではなかったろうか。というのも、例えば、先のシュネーガンズは、フランスを「母国」と言い、フランス文化の恩恵を肯定する一方で、アルザスを「わが祖国」と呼び、フランスへの帰属と引き換えに犠牲にしたドイツ的民族性を見直し、かつ、フランス人との相違を認識することが、アルザス人をアルザス人たらしめることになることと述べているからである（三二〇―三二二頁）。換言すれば、彼にとっては、フランスへの帰属よりもアルザスへのそのほうが重要であり、彼のアルザス意識は、フランスとの結びつきを強調することや、ドイツと距離を置くことよりも、ドイツの異質性を認識

することによって強められているように思われる。だとすると、少なくともシュネーガンスにおいては、著者の言うように、地域意識が国民意識に従属しているとは断言できないし、彼の考えは、ドイツ帝政下で姿を現す自治主義の萌芽にも見える。③以上は、著者のごとく、フランスからの同化圧力に対する一定の文化的自立性の主張（三五三頁）と言うだけで本場に事足りる問題であろうか。

また、以上に加えて、民衆の帰属意識にはほとんど言及がないこと、共和派プロテスタントが主導権を握ったグーテンベルク、ウエストフリアアの阿祭典が、アルザス人の記憶に持続的な影響を及ぼさなかったこと（二八六、三四五／三四七頁）を考えあわせると、本書が考察した三祭典が、国民アイデンティティの内面化、地域アイデンティティの形成に、実際の程度貢献したのかについては、疑問の余地が残るように思われた。但し、革命・帝政期の記憶と結合したフランスへの帰属意識の内面化が、必ずしも自然に進んだわけではなく、共和派による誘導を伴っていることを明らかにしたのは本書の功績と言える。

第二に、本書は、ドイツのアルザス観は詳細に取り上げているが、フランスのそれについては多くを語っていない。しかし、シュネーガンスの、アルザス人はフランスでは外国人だと感じるのとが少なくないという言葉（三一頁）は、アルザスに対するフランスの視方を示唆しており、フランスのアルザス観は、アルザス人の自己認識に作用したはずである。また、この点を明確にしなければ、フランスは、アルザスの「ドイツ性」を、フランス国民文化を豊かにする要素として許容しえたという著者の結論（二三

五四頁）の是非も判断できないだろう。

また、逆に、アルザス人の国民意識の表明は、フランス国民意識の形成全般に全く何の影響も及ぼしていないのだろうか。というのも、本書は、ドイツがアルザス人の支持を得るためには、ドイツ統一が不可欠であるという発言を取り上げており（一三九頁）、このことは、アルザスのフランスへの支持表明がドイツ国民意識を強める働きをしたことを示唆しているからである。この意味でも、フランスのアルザス観の分析がなかったことが惜しまれる。

付言すると、本書が示している、アルザスが仏独交流の場となつた事実も、アルザスの自己規定、例えば、仏独の調停者という使命、と無関係ではないはずである。

もし、以上の点に関して、いまだし立ち入った考察がなされていれば、著者も言及するアイデンティティの流動性や多義性（一二一―一三頁）、及び、複数の次元のアイデンティティの錯綜と背反がより鮮明に描き出され、本書の意義をさらに高めたように思われるのだが、これは評者の思い違いであろうか。

いずれにせよ、本書が、一九世紀前半のアルザスのアイデンティティの一端と、その研究対象としての魅力を提示したことに疑いの余地はない。本書が刺激となり、当該時期・分野の研究のみならず、広く地域と国民の関係をめぐる研究が深化することを願いつつ、筆を擱きたい。

① ドイツに関しては、以下が研究動向を整理している。西山曉義「一九世紀ドイツにおける「国民国家」と「地域」―近年の欧米の研究から―」『共立国際文化』二四（二〇〇七）、五七―八二頁。

② この論争については、E・フィリップス（宇京頼三訳）『アルザスの言語戦争』白水社、一九九四、八五―九二頁。

③ 残念ながら、L・シュネーガンスと、ドイツ帝政下でアルザスの自治運動を担ったA・シュネーガンスの関係は評者には突き止められなかった。もし両者の関係が判明すれば、自治主義の源流が一九世紀前

半に見られると言えるかもしれない。A・シュネーガンスについては、市村卓彦『アルザス文化史』人文書院、二〇〇二、三三一頁。

(Aschendorf Verlag, Münster 2010, XII, 381 S., EUR 29,00,-)

(甲南大学非常勤講師)